

「藤篋冊子」からみた秋成の短歌について

野 中 由 美

目 次

- 序 (略)
- 本論 第一章 歌人秋成の位置について (略)
- 第二章 秋成の歌論について (略)
- 第三章 和歌の素材について
- 第四章 秋成の歌の特異性について
- 結び (略)

ここでは紙面の都合上、第三章及び第四章について述べる。

第三章 和歌の素材について

上田秋成の和歌は、何についてうたっているのか、和歌の素材の面から眺めてみる。和歌の素材において、秋成らしい特徴が表われていると考えるのである。よって、素材を分類検討していきたいと思う。

浅野三平氏の部立によると、次に掲げる分類ができる。

季節	項目	歌数	全体に対する割合
春	桜 梅 鶯	五七首 二二二	三七% 一四
夏	時鳥 雨	六 六	三、三 三、九
秋		二二三	二七

又、各季節ごとに多く詠まれている素材を示すと次のようになる。

項目	歌数	全体に対する割合	項目	歌数	全体に対する割合
春歌	一五四首	二二%	恋歌	二〇首	三%
夏歌	八五	一一%	哀傷歌	八	一
秋歌	二二七	一七%	賀歌	二	〇、二
冬歌	九〇	一二%	雑歌	二二三	二九
長歌・反歌	四八	六%			

冬	秋	夕立雨	八	九
雪 <small>しゆゆ</small>	紅葉	二〇	一七	一六
八	二二	二四	九	

春歌は全体の約二〇%を占めているが、この部立の中で、又、全体を通して最も多く詠まれているのは桜である。春歌一五四首のうち、三七%の五七首詠まれている。『藤笈冊子』全六巻においても、その題が桜でなくても、和歌の中に桜を詠んだものを含めると七一首(内長歌二首)見られる。これは七四七首の全体に対して、一〇%に近い率であり、秋成にとって桜は重要な主題なのであったと思われる。次に掲げる歌には、秋成の桜に対する限りない愛惜の情とやさしい心遣いとがみえるのである。

雨中花 354 さくら花うれしくもあるか此夕べ嵐にかへて小雨そぼぶ

閑居花

404 花ありて住やはつきしすみつきてうつしや植し山本の庵
407 夕日影かゞやく案のさくら花けふもながめてくるゝ庵か

落花

413 散(る)までとたのめし庭の花にうき晴がたのむら雨の
415 音 422 桜花散(る)を心のはてにして残る日数の春ははるかは

423 根にかへる花としいへばたのまるる又くる春も梢にぞ見

又、次の

嵐山花 375 大井川くだす後の跡たえて夕べの波に花ちりうかぶ

の歌は、秋成のもっとも愛した桜の歌であらうと思われる。彼の書『鶉の屋』『四季風流総巻』『白筆短冊』などにも載せられている桜花詠である。この歌は大井川の波に浮ぶ小さな花びらに、じっと目をそゞぎ、華やかさの中にも寂しさを詠んだ歌である。

それでは、この秋成の桜花詠が他の歌人のそれと較べて、どういう特色があるのかと言う事を考えてみたい。秋成以外の歌人として西行をとりあげてみる。それは秋成が、次の如く歌人西行を大要意識しているからである。『胆大小心録』に拠ってみると、彼は「『櫻を雲じゃと見たて、又雪じゃともいふ事、さいく人一二人に聞(き)うからず』と真淵はいはれしとぞ。西行ほどの道人が、とかく雲が桜に見へ、桜が雲に見へて、よしの山に三とせ行ひのみまひまには、雲じゃと云(ふ)歌たんとよまれたり」と、西行が桜を雲と見て詠じた歌例えは、『山家集』にある次の(番号は『日本古典文』)65 まがふ色に花さきぬれば吉野山春ははれせぬ案の白雲
81 おもひやる高嶺の雲の花ならばちらぬ七日ははれじとぞ思う
90 雲にまがふ花の下にて眺むればおほるに月は見ゆるなりける
などに對して、先のように異論を唱えているのである。又、『藤笈冊子』においても、秋成は西行への非難を暗にこめたと思われる歌即ち、花頂山のふもとに住せめし春、
367 すまで我見やはさだめん粟田山泡だつ雲は桜也けり

を詠み、自分は山の麓に住みはじめた春に(西行は吉野山に三年住

んでいた) 桜と雲とを見分けることができるようになったと述べているのである。秋成みずからも『藤篋冊子』において、桜が雲に似ているという歌

1685 よしの山雲とまがへる花さけば花にもまがふあかつきの雲

を記してはいるのだが、この歌と先の西行の歌との相違について、浅野氏は「西行の吉野の三首と、秋成のとを較べてみると、西行があまりにも『雲にまがふ』と桜即ち雲と見ているのに対して、秋成のは『雲とまがへる花』が咲けば、美しいあかつきの雲が花にまがふ程であると表現している。わかり易く言えば秋成は桜即ち雲と見て詠んだわけではない。あくこれも雲は雲であり、桜は桜なのであってこの点、西行の態度と明らかに違っている」(秋成全歌集とそのと述べていられる。私も西行は、65・90番の歌のように、花と雲とを同一視して歌を詠んでいるのに対して、秋成は1685番の歌のように花と雲とを同一視せず、単に一時的に見違える点として、両者の態度の相違について浅野氏と同じ考えをもつのである。又、同じく

524 まがはじと花に別れて小初瀬の夕はかへる春のうき雲

の歌においても、浮雲と花との違いをはっきりと見ている彼の姿がしられるのである。：(略)：以上、みてきた如く、西行は吉野の桜を、その色、容子から空想して雲とみなし、瞑想的に歌を詠じているのに対して、秋成は、花と雲とに想像をめぐらすことなく、そのままの姿をもって、つまり直観的自然観照的な態度を持って作歌しているように思われるのである。：(略)：以上の秋成の自然観照的な態度は、梅を詠んだ歌においてもみられる。例えば
梅 123 空さえて香ごめに風のおくりくる雪と梅とをわきて見なまし

の如く、降ってくる雪と梅の花びらとを区別してみてほしいというふうに瞑想的に歌を詠むことを、はっきりと否定しているのが知られるのである。

次に、冬歌について考えてみたい。冬歌は九〇首詠まれていて比較的少ない。寒い冬には、人との行き来が自然に途絶えがちになってくる。猜介な性格であるが故に、自分の殻に閉じこもりがちな秋成ではあったが、そのような孤独な者ほど友を必要としたのであろう。だから人との行き来が絶えがちになる冬を、秋成は好まなかったであろう。

1268 世の事は聞えぬ冬の山里にけふもしぐれの音づれぞする

1289 禿庵しぐれのやどりして其あした傘もたせこされしにいひやる

むら時雨ふるにとなれる笠の山かさでぞ君をとどめましもの
彼の人を慕う気持がよく表われている。人も訪れず、草木も朽ちた寂寥たる冬に、老境の秋成は何か心細さを感じないではいられなかったのである。

感懷二章 1478 淡雪のあはれは老が思ふ事つむとはすれど下崩れして

故に春の訪れを心から待ちわびていたのであろう。

冬の梅 1529 こぬ春にあらぬ物から待(つ) ほどを梅は心にまかせて

ぞ咲(く)

満開の梅の花に、春の近づきつつある事を知り、喜ぶ秋成の姿が日に見えるようである。

夏歌も冬歌と大差なく八五首と少ない。しかし、その中で時鳥だけが二七%も占めている。時鳥を詠んだ歌は鶯を詠んだ歌よりも多い。ここでその声を詠んだ歌を中心として、両者を比較してみることにする。先ず、時鳥の方から揚げてみる。

時鳥 566 ここだ鳴(く)里にはすめど時鳥初音をいづもうれしとぞ

きく

579 人やどすこは庵ぞほととぎす此あかつきの聲なをしみそ
杜鵑を北山のあがたの出居にまつ

604 ほととぎす待(つ)をならひと夕かけて山のいほりに長居

せしかな

次に、鶯の歌を掲げる。

鶯 167 高圓の野べ見にくれば新草まじり鶯なくも

171 春の野の鶯の草ぐき誰見ねどおどろき顔に鶯のなく

180 山彦はこたへこそせね鶯の聲のさかりのはるの木がくれ

兩者を較べて気付くことは、秋成が時鳥の声の方に好意を寄せていることである。鶯の泣き声は、どちらかといえば夢幻的、瞑想的に聞こえるものである。これに比して「テッペンカケタカ」と聞こえる時鳥の鳴き声は、より力強く現実的なものであろうと考えるのである。ここにも秋成の、より現実的なものを好む態度の一面が伺えるのではなからうか。

次に秋歌について述べる。秋歌は春歌に次いで一二七首と多いが

秋も彼の好きな季節の一つであったのだろう。次に掲げる歌には、この秋を迎えて喜ぶ彼の姿が詠まれているのである。

初秋 829 初秋の朝けの風を身にしめて思ふにかなふ比にも有(る)

かな

あした湖上の楼に遊ぶ

912 白雲に心のせてゆくらくら秋の海原思ひわたらん

1053 秋の月あふぎてのみもありがてに筆の林を分ぞ煩ふ

しかし、このような歌の反面、秋のもつ哀れ寂しさも感じないで

はいられなかったのであろう。

山月 1062 我すめど門たたくべき人もなし此山寺の秋の夜の月

1095 秋風に月すむ夜半の白雲をはらへどかかる吾心かな

1096 夜ひくりに月は出ぬかなぐさまぬ心の隈をてらすばかりに

雁 1108 てる月に雁のまれ人なきわたる秋まつ友はこよひこなくに

1062 1108 番の歌には、やはり人を恋うる気持が詠み込まれているのである。秋の歌で、月が多く詠まれているのが目につく。しかも、月は

秋ばかりでなく春、夏、冬にも詠まれているのであって、これらを

合わせると三〇首となり、桜の歌に次ぐ歌数をもつのである。この

秋成の月の歌はスケールの大きなものが多い。

1029 山高みあらしのうへに身をのせて空にさやけき月を見るか

1039 紀の海の南のはての空見れば汐けにくもる秋のよの月

水辺月 1074 生駒山影まだ案に別れぬを浪花の海は月に成けり

1079 千里まで照せる影とゆふ波の汐のたたへに月さし昇る

海を背景とした雄大な月見の歌をよんでいるのである。これを西

行の 342 はりまがたなだのみ沖にこぎいでてあたりおもはぬ月をなが

めむ 343 月すみてなきたる海のおもてかな雲の波さへたちもかからで

の如く、沖に漕ぎでて海洋のただなかで、月を詠んでいる歌と較べ

た時、そこには何らかの共通性を感じずにはいられないのである。

この月の歌と先に述べた桜の歌とから、秋成は西行の歌の自分に適った点は大いに吸収し適わぬ点はきっぱりと否定するといった一本筋の通った人物のように思われる。(以下、動物歌についてであるが紙面の都合上、これは省略する。)

以上、和歌の素材について述べたが、秋成は春・秋・桜・月・動物をよく歌に詠んでいたのである。にぎやかな春・桜に心をひかれていますと同時に、寂しい秋にも心をひかれていたのである。又、動物歌においては、彼のやさしい心遣いや弱動物に対する愛情が知られるのであるが、その反面、人に世にすねた秋成の暗い一面も感じられずにはいられないのである。

第四章 秋成の歌の特異性について

(秋成の歌風は、かなり多彩であって、万葉風のもの、古今風のもの、新古今風のものがあるが、ここでは紙面の都合上、これらについては省略する。)

このように秋成の歌には、万葉・古今・新古今の歌風があると同時に「どこへも持ってゆけない」歌もあるのである。そして、この「どこへも持ってゆけない」歌風は、秋成が『異本胆大小心録』で「歌も文も我が思ふ事を偽らずに読み書きせうと思ふて、古歌をたんとおほようとと思はずして楽な遊びじゃあった」(秋成遺文二四九頁)と述べている如く、「我が思ふ事を偽らずに」「古歌をたんとおほようとと思はずして」という秋成の作歌態度から詠まれた歌であると私は思うのである。つまり、秋成が自分の見たところ、思ったところを少しの偽りもなく、自在に歌っている歌だと思つのである。だからこそ、秋成は作歌について「楽な遊びじゃあった」と

言い切ることができたのであろう。それでは、次に秋成の「どこへも持ってゆけない」歌、乃ち自在に詠んでいる歌を掲げてみる。

(早春歌) 70 柳もえ慮つものぐみて津(の) 國のながらの堤ひとのい

きかふ

(鶯) 71 都辺はちまたの柳園の梅かへり見多き春に成にけり

168 かげろふのもゆる春日の小松原鶯遊ぶ枝うつりして

170 宿しめてねよげにも有(る)か鶯の梅のこまくら我にかさ

なん

(柳) 195 大寺の門辺にたてる古柳土はくまでに枝は垂にけり

(鶯) 484 みよしのは青葉にかはる岩陰に山下照しつゝじ花さく

(蟬) 703 鳴(く)せみのやどりの松の木(の)木にもぬけの衣の風

に吹るゝ

(落葉) 1291 森深き神の社の古籬すげきにとまる風の落葉は

(連) 1336 夜のほだにふりしや雨の庭たづみ落葉を閉てけさは水れる

1340 はふり子が清むる跡に木(の)葉散て神のみたらし米ぬに

けり

(野) 1726 むら雨の名残は草に埋れて野末の小川音まさるなり

(鯛) 1980 安濃の浦に鯛つる蟹がけふもまた釣り誇りては酒にかふら

む

(前) 130 折ばやと立よる梅に鶯のゆるさぬ聲をおどろかすかな

以上の歌は、屈託のないのび／＼とした詠み方で秋成には見るところ思うところ自在に歌ができていたのである。秋成は五才の時、上田氏に貰われ、養父である茂助の亡くなる二八才まで家業の手伝いもせず、養父のもでかなり自由に育てられたものと思われる。

この時に彼の自由でのび／＼とした性格が養われたのであろう。そして、この性格の一面が、これらの自由でのび／＼とした歌を彼につくらさしめたのではなからうか。

秋成はこれまで述べたような叙景的な歌ばかりでなく、いわゆる抒情の歌においても、やはり自在に詠んでいるように思われるのである。

すみかさだめず、をちこちしあるくを今はいづこにと人のとひくれば

2190 風の上に立まふ雲のゆくへなくあすのありかはあすぞ定めん

又、長柄の濱松陰にかりほつくりてすむとて

2191 むすぶより荒のみまさる草の庵を鴉の床となしやはてなん

庵を鴉居と名付しは、聖人鴉居穀食の謂にあらず、鴉は常居無しと云（ふ）によれるなり

此いほりにある夜ぬす人入て、いささかある物をかつぎてもていにけり、あした思ふ

2192 我よりもまづしき人の世にもあればうばらからたちひまくどる也

その入りし壁のこぼれを窓に作らせて盗窓と名づけて風を入るる便りよしと人にかたりしかば、あなしれじれしとて、あしく云ふとも聞えし

これらの歌は、家集の雑歌に見える歌で、彼の生活に即して所懐を述べた一連の作の中に見えるものである。風に吹かれる雲のように漂々とくらしたわび人の洒脱な気持が歌われている。2192 番の歌は、盗人に入られながらものうのうとして詠んでいる歌である。そしてその左註には盗人のこわして入った壁の穴を窓に作らせ、盗

窓と名づけて風を入れるのに好都合であると語ったところ、人々から笑われたと記しているのである。そればかりではなく、この泥棒の話については泥棒にまんまと入られ、家内をその泥足で汚されながらも命の助かったことをよるこび、泥棒のこの赤貧では物を盗るどころか置いていきたくない気になってしまおうという書きのこしをめで、できるならばこの泥棒と一ぱい酌みかわしたかったと思う彼の虚構までも存在しているのである。以上この抒情的な歌においても、彼の自由でのびのびとした歌風が充分に示されていると思うのである。そして、この自由でのび／＼とした歌は、第二章でも述べた如く秋成の「……歌は心の中よりいづる者也」という歌論、つまり、本当の歌は、作爲のない心からにじみでてくるものであるとした歌論を踏まえて詠まれた歌と想うのである。又、秋成は『鶯尖行』『つづら文』で、歌は、自分があはれと思ふ事、乃ち心こまかく繊細にして情があると思ふものを歌うものであると述べているが、195・703・1291・1336・1349・1726 番の歌には、特にこの歌論があらわれていると思う。これらの歌は、普通、人々が心をとめない風景に情趣を見出し詠まれている歌なのである。

このように秋成の歌は、見たまま思ったまを素直に詠んであり、のび／＼とした屈託のない歌が多い。しかし、次に掲げる歌を見る時、彼の幼い時から培われた人にそして世にすねたような暗い一面を表わしている歌も多少存在しているのが知られるのである。

(犬) 1967 鷹すゑてわくる野山にひく犬のさときは人にうとまれぞす

(山田に喬松立り) 2034 植はてし山田の岸のひとつ松影いとはるる時は来にけり

(竹與し心俱空) 2043 ためずとも直きこころはおのづから竹とともに

やむなしかるらん

(白眼看三他世上人)

2049 世の中の人をさくればおのづから塵なき庭の松の下臥(し)

(調與三時人二背心将三静者論)

2051 我をしる人しなければ我しらぬ人に見すべきこと草もなし

(溪舟因天地一釣竿の心を)

2053 海ばらにたゞ一筋の釣の糸の外にうつさじおのがこころを

1967・2034・2043 番の歌には、彼のひねたようなものの見方が、2051・2053 番

の歌には容易に心を開かぬ秋成の態度が見受けられるのである。このように暗い歌を詠んでいる秋成だが、私はここにおいて、秋成の

「……歌とは心の中よりいづる者也」という作歌態度、つまり、飾

らずに、偽らずに歌を詠むという彼の作歌に対する信念を、はっきりとみたような気がするのである。

以上、秋成の歌の特異性について述べてきたが、秋成の歌は、万葉風・古今風・新古今風・を示していて、かなり多彩であるが、しかし、彼の歌としてその特異性を示すものは、古歌にとらわれた作ではなく、古歌に学んだ教養を充分生かして詠まれた歌なのである。そして、その詠まれた歌とは、彼の自由でのびのびとした性格から作られた歌であると共に、彼の暗い性格から作られた陰鬱な歌であることも見逃がしてはならないと思うのである。

以上、第三章、第四章について述べたが、第一章、第二章については、提出の卒論を参照願いたい。

「球磨・人吉地方の人称代名詞」

荒 嶽 久 美

目 次

- 序
- 一、研究の動機と目的
- 二、調査地域
- 三、環境と歴史・人事

四、調査

本 論

第一章 第一人称の人称代名詞

- 一、オイ
- 二、ワシ
- 三、ワタシ